

Title	コスモポリスと地域コミュニティの共生：モダン上海の形成過程を手がかりに
Author(s)	王, 暉
Citation	年報人間科学. 27 p.135-p.151
Issue Date	2006-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25874
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

コスモポリスと地域コミュニティの共生

——モダン上海の形成過程を手がかりに——

〈要旨〉

一八四三年の開港を機に近代都市的な生活基盤が整備され始めた上海。一九三〇年代には世界第五の都市になる。この奇跡については多くの議論が展開されてきた。上海研究は八〇年代から多様化するが、社会学の領域ではあまり成果はなかった。

本論文では二人の歴史学者の業績を取り上げる。Lee, Leo Ou-Fan, *Shanghai: Modern v. Lu Han-Chao, Beyond the neon lights* である。Lee は都市上海が上海人の精神生活にいかなる影響を与えたかを追求した。租界上海で生まれた「生活様式」が呉城上海などを巻き込み、アーバニズムは作り上げられる。一方、「R」は呉城上海の地域コミュニティから出発し、その延長線上に租界上海のコミュニティを位置づけようとする。

二人の著作を社会学的に再構成することにより、上海の異なる画像に遭遇する。すなわち、近代的、西洋的な文化の巨大な感覚器官と仲介になつていったコスモポリスと、中国小都市との親縁性を持つ里弄から広がっていった地域コミュニティがそれである。二人の議論の重点は違ったが、とも

王
曄

に近代都市上海を、西洋と中国及び中国各地の文化が融合され生まれた、人々の生きられた新しい空間として描き出そうとした。近代上海を定着させた影響の中でも無視できない力は住民の行為である。人々の近代化に対する不屈の適応は、コスモポリスと地域コミュニティの共生するモダン上海という、一つかつてない文化へと導いていったのである。

キーワード

公共空間、コスモポリス、里弄、地域コミュニティ、共生

1 上海研究の系譜

中国の歴史の中で、上海はそれほど古い町ではない。そこは豊富な資源もなく、政治や軍事の中心になることもなかった。ただし当時の中国政府によってなされていた海禁が全面解除されると、その恵まれた地理的条件によって、上海は物流の中心となり、十八世紀の中頃から少しずつではあるが注目されるようになった。とはいえ上海はなお一つの県城を中心とした中国の地方街にすぎなかった。

ところが一八四三年の開港で、もともとの市街地である上海県城の北方の荒地に外国人居留地が設定されると事情は一変した。近代都市的な生活基盤が整備されたこの区域は租界と呼ばれ、上海県城は華人の区域という意味で次第に華界と呼ばれるようになった。さらに一八五三年九月の小刀会の蜂起と上海県城の占領により、中国人が租界に避難してくると、華洋雑居の局面が形成されていった。租界の人口や貿易の規模などは一気に拡大し、租界は新しい上海のコアになっていく。一九三〇年代、開港から百年も経ないうちに上海は世界第五の都市になる。この奇跡的な都市上海の生長軌跡は人々の関心をひき、様々な議論が展開されるようになっていった。

本格的な上海研究は一九二〇年代頃に始まる。その劈頭を飾るのが王揖唐の『上海租界問題』（一九二四）である。以後、現在に至るまで、租界の問題は上海研究の重要な試金石となり続け、租界の意味や役割の捉え方が、上海イメージを根底的に決定してきた。その

研究史は大きく三つの時期に分けられる。

第一の時期は租界という問題構成を定礎した一九二〇年代から四〇年代の研究に求められる。その焦点は例外なく、租界および租界と外国の関係だった。中国人研究者は主権問題を議論し、欧米研究者は西洋人の行為を美化し、日本人研究者は日本との関係に注目するなど、それぞれの傾向は認められるが、いずれも上海県城の封建都市と租界上海の近代都市とを対比し、近代都市上海が中国の自力ではなく、欧米の資本によって建設されたものだとする捉え方は一般的だった。

五〇年代から七〇年代までの時期、中国では階級闘争の内容が過度に重視され、上海研究は空白期と呼びうる状態におかれる。西洋人研究者の場合、中国の現代化に対して上海の発展が果たした貢献を強調し、一方、戦争に対する反省と疑問から出発した戦後日本の上海研究は、上海の近代化を西欧列強の中国侵略とそれへの闘争の過程として考える傾向を強めていた。この時期の研究は、革命運動や帝国主義的支配など政治問題に集中していたという指摘がなされている。

こうした上海研究に決定的な変化がみられるのは八〇年代以降のことである。八〇年代に中国で開放政策が実施され、學術研究の場に自由な空気が戻り始める。国外研究者が上海研究をすすめることも容易になり、その研究は漸く政治観念から離れていった。とくに九〇年代に入り、米国のパークレイやコーネル大学などで、上海研究グループが形成され、九五年に世界的なアジア研究誌『アジア研

究季刊』で上海特集が組まれるなど、上海研究への注目度は非常に高くなっていった。

では上海研究の盛行に対し、社会学の果たしてきた役割はといえ、残念ながら、目を見張る成果は認められなかった。ところが一九九九年、社会学の視点からきわめて注目すべき二つの大きな業績が発表される。Lee, Leo Ou-Fan, *Shanghai Modern: the flowering of a new urban culture in china 1930-1945* と Lu Han-Chao, *Beyond the neon lights: everyday shanghai in the early twentieth century* である。この二つの作品は、都市上海をそこに棲む人々の生きられた世界として描き出そうとする。上海の都市像は、そこに棲む人々の相互行為の産物として導き出されるのである。

Leeの著作の詳細は、第二章で論じるが、彼はジンメルの「大都市と精神生活」を彷彿とさせるやり方で、都市上海が上海人の精神生活にいかなる影響を与えてきたかについて、多面的かつ執拗に追求する。租界上海で生まれた「生活様式」が県城上海などの華界をも巻き込み席卷するという動きの極限に、上海のアーバニズムは作りに上げられる。

対する「L」は、アメリカ都市社会学におけるオーソドックスな手法に従い「地域コミュニティ」に視点を定め、上海の都市イメージを描き出そうとする。彼は県城上海の地域コミュニティから出発して、その延長線上に租界上海の都市コミュニティを位置づけようとする。

Leeにとって、県城上海が租界上海によって席卷され、支配され

る受動的存在だとすれば、「L」にとっては、租界上海は県城上海によって圍繞され浸食されるものとなる。

この二つの著作のテーマは異なるが、ともに二〇世紀前半の上海都市という研究対象を持ち、しかも共通の問題意識を潜在させている。LeeとLuの著作に立ち入って論じること、両者の相互補完性および共通の問題意識を議論し、いま何故、上海が我々をこれほどまでに魅了するのか、その謎の一端に迫りたい。これが本稿の課題である。

2 公共空間から始まったコスモポリタン

近代上海の影像を捉えようとしたLeeが、最初に注目したのが、摩天楼に代表される外観の変化であった。

開港後の上海をその全体像から眺めたとき、そこには旧来の姿をとどめたままの上海県城とその外部に開拓された租界での、新しい市街の無から有への発生という変化が認められる。これによって近代的物質的な要素は装いを凝らして次々と舞台上に登場してくる。

摩天楼や百貨店、カフェ、ダンスホール、競馬場に公園、映画館など西洋的な公共空間は、これら要素の登場を目に見える形ではっきりと知らせている。これら公共空間は隣接する上海県城の低い民居や茶室との強いコントラストを生み出し、同時に開港都市上海における新と旧、西洋と中国という対照を物語るようになつていった。

だが中国住民にとって生長する西洋世界は、踏み入れられない別

世界ではなかった。華洋雑居の開始と租界の発展に伴って、中国人の活動と上海の中心は呉城から租界へと移動していった。租界に新しい公共空間が出現すると、中国人は積極的に足を運び、見学の群れをなした。彼らは租界の百貨店で買い物をし、ダンスホールで社交を楽しみ、映画館で西洋の物語を鑑賞するようになる。また彼らは都市上海を消費するばかりではなく、その生産にも積極的に関わっていく。東洋一の高さを誇った国際ホテルは一九三四年、中国人の投資によって建設されたものであったし、南京ロードの四大百貨店もすべて、華僑が投資した事業であった。三〇年代掲載の記事には、モダン都市上海の風景がつぎのように描かれている。

上海を訪れたばかりの西洋人は次の光景を目にして驚くだろう。南京ロードを疾走する最新モデルのロールスロイスは、オックスフォード通りやフィフスアベニュー、PAIX通りに並ぶ百貨店と遜色ない店の前に止まる。そして一步、店の中へと足を踏み入れれば、そこには西洋本国のブランド商品が、所狭しと並べられている。Jaegerのセーターの隣にはB.V.D.の下着、Houbigantの香水にFlorsheimの靴。百貨店の中はこれら魅力的な商品で溢れている。コスモポリタンな品揃えの百貨店のある上海は「ユニバーサルなプロバイダー」として、外国と中国の製品を取り扱っていることを十分に誇りうる。(SM: 14)

上海呉城には茶室や遊廓といった旧来どおりの公共空間が依然そ

の影響を残していた。しかし租界から始まった西洋的でモダンな公共空間は中国人の活動の場所になり、これらの場所が中国住民に、従来の伝統的な生活とは異なる憩いと娯楽のスタイルを提供するようになる。それは一つの現代文化とスタイルの受容を意味しているが、重要なのはそれが中国住民の自主的な選択のなかで行われたことである。西洋的な空間と物質は中国の伝統的なものと一緒に、上海の風俗となり、こうして生まれた新しい空間が寧ろ上海の代表的なものになっていく。摩天楼と同様にダンスホールで社交ダンスを踊るチャイナドレスの女性と中国の伝統的な服装や背広姿の男性は、三〇年代の代表的な上海風俗図となった。

Leeは公共空間を中心に上海が近代都市としての原型を整えていく経緯をつまびらかにしていった。物質的な側面からのアプローチは「世界第五の都市上海」、「コスモポリタンな都市上海」の容貌を我々に垣間見せてくれた。だがLeeにとって上海は物質的要素だけで捉えられるものではない。上海の理解には、さらに別の要素が重要になる。彼は言う。

文化的な意味で、上海をコスモポリタンな大都市にしたものは何なのか。それを定義することは難しい。(SM: 7)

物質的な要素の一部をなす公共空間は、生活スタイルの付着という意味で、都市の文化とも関連がある。しかしLeeは上海都市の文化を捉えるには、この物質的風景を生活の背景とする、上海の文化

人の行動に注目する必要があると考えた。そうした彼らの志向性を顕著に示すのが一九二〇年代以降、広く流布した二つの言葉、「時代」と「新時代」だった (SM:44)。

西洋文明は中国人に衝撃を与え、中国のエリート層に自国の後進性に気づかせもした。それは中国文化を全面的に否定しなかったが、自国の文化が孕む弊害を過度に強調する結果、西洋と中国、現代と伝統、新と旧とを対立的に捉える傾向を増長させた。列強の侵略、世紀の転換、帝政の崩壊など外憂内患の状態にあった当時、古い文明を誇ってきた中国人は、「新」に憧れ、それを通じて時代にみあった活気ある生活を夢見るようになる。上海は古い中国の中において、最も活気あふれる新しい都市として映じることになったのだろう。

「新」を象徴する上海に集まった多くの文人は、新文化の伝播に関心を寄せる。租界を背景に現代的設備や資金などが揃う上海はモダニティという観念の、文化産物を産み出す恰好の工場となる。実際、上海には中国で最も多くの出版機構が集中していた。とくに福州路界隈は、北には租界で一番の大通り南京ロード、南には伝統的な空気が漂う上海县城の中心地という租界と華界の境界に位置し、上海の八割の書店、新聞社が軒を連ね、現代文化活動の重要な現場になっていた。

摩天楼などの公共空間や西洋的な物質から受けた衝撃を、上海中国人は出版文化の実践を通じて、自らに取り込む活動へと展開していた。それゆえ「新」は通常、論じられるような政治や思想など高尚な視点ではなく、都市文化を産み出す文化母胎としての出版文化と

いう大衆的な領域から上海へとアプローチする。その手始めとなったのが、上海でも最も有名な商務印書館と良友図書公司という二つの出版社であった。

まず商務印書館の出版した雑誌・書籍をみると、そこには政府を越えた民間からの自覚的な教育役割の遂行という方針がうかがえる。一九〇四年に創刊された『東方雜誌』では、「学理を研究、思想を啓発、習俗を更正」という編集方針が打ち立てられ、ほかに出版されていた九つの雑誌とともに、学生や主婦など様々な読者層と需要に対応するよう工夫された、自学者むけの内容になっている。さらに辛亥革命直後の一九一二年に新教科書として発行された『共和国教科書』は生活のために就職し、十分な学校教育を受けられなかった人も利用できるよう配慮されている。また一九二三年から一九三四年にかけて出版された東方文庫と万有文庫の目的は、「人生に必要な学識を、一般読書層に注ぎ込む」とこととされ、万有文庫の場合、国学の他に五〇〇冊の西洋学の書籍が発行された。

一方、良友図書公司は一九二六年に雑誌『良友』を創刊する。女性のモダンな装いや現代的なインテリア、健康衛生や国内外の記事にあふれた『良友』は、上海が世界の風を感じられる現代的な街であることを読者に伝える。このモダン都市上海を演出する『良友』の表紙のほとんどを女性の肖像が飾った。清末の名妓新聞紙が掲載するのは娼婦の肖像だったが、『良友』では女優や有名な妻、女学生の写真にかわる。名妓文化が完全に消えることはなかったが、それは現代的で尊敬できる女性像という、新しい装いのもとに生ま

れ変わった。

さらに彼女たち新女性は表紙ばかりでなく、雑誌の中身でもその姿を展示する。現代的なインテリアに囲まれたリビングや寝室でくつろぐ新女性はハリウッド女優のような髪型をし、QUAKER OATSを理想的な朝食にする。彼女たちはモダンな室内から公園や百貨店映画館など様々な都市的空間へと移動して、都会の資産階級の生活スタイルを演じる。

だが百貨店やジャズバンド、映画館と女性の写真を組み合わせる上海のアウトラインを演出した『良友』は、のちに路上の乞食の写真も掲載する。つまりLeeが取り上げた『良友』の中の上海には、少なくとも二つのイメージが重ねられているのである。一つはダンスホール、百貨店、モダンガールなどの写真で組み合わせられた上海。そしてもう一つが、路上の乞食や露店の写真によって映しだされる上海。Leeは言う。

これらの写真の組合わせで、上海という街の興味深い自画像が露わになる。雑誌によって都市は、まず魅力的なものとして演出され、つぎに批判される。まるで写真に埋め込まれた想像的なモダニティは巧妙な構成によって印刷され、断片化されたファンタジーにすぎないことを示そうとしているかのようだ、だが同時に写真の同様の趣向が、このファンタジーがリアリティに基づいたものであることも暗示する。編集者がどんなに一生懸命、上海の貧しい一面を呈示しようとしても、読者の想像力を

深く捉えるのは、まさにこのモダンなファンタジーの方なのだ。(SM:76)

地方出身者であることを公言する作家の沈從文は『良友』は上海の気風を製造する」と批判した(沈、1985:149)。だがまさにそれは『良友』の主旨と役割でもある。『良友』には上海あるいは都市の現代的気風をつくりだそうとする傾向はあるものの、その想像が現実からまったくかけ離れたものでないことも確かである。百貨店やダンスホール、舶来品の消費が、すべての上海市民にとってごく日常的なものでないとしても、それらのものが上海に存在しているということは事実である。さらに上海市民が雑誌『良友』の描く家庭生活に憧れ、それを実践しようとするとき、活字によってつくられた想像は読者の行動によって具体的な現実味をもつようになる。

私がこうした都市文化【商務や良友のような出版産業】の人為的な側面を強調するのは、日常生活に対する文化史家の学問的な関心からだけではない。都市のモダニティのこの側面こそが文化基盤を用意すると信じているからにはかならない。そしてこの文化基盤において文学と芸術とが組み合わせられた独特の感性が育まれたのである(SM:82)。

摩天楼や百貨店、そこに陳列される品々を輸入する動きの中には、すでに広い意味での文化の仲介が含まれていた。そして文庫や教科

書、『良友』のような雑誌からは西洋科学および生活理念といった狭い意味での文化の輸入が、かなりの程度で行われていたことが分かる。このようにみると都市文化の「人為的な側面」というのは、「輸入」という外部から人為的にもちこまれる動きと密接に関連していると言える。これは同時に上海都市の文化基盤を生み出すプロセスにおいて、輸入という動きが無視できない役割を果たしていることを意味する。そして西洋から輸入された様々なものの中でも、とりわけ活発に西洋と中国という文化を仲介し、上海都市文化の生成に深く関与することになったのが文学作品である。

モダンな公共空間で、比較的容易に都市的な感性を感得しうる上海では、数多くの西洋文学作品の原作と英訳、また 'ESQUIRE' や 'THE NEW YORKER' などの文学雑誌を手に入れることができた。一九二〇、三〇年代には、横光利一や G・B・ショー、ユージーン・オニール、ポール・モーランなどの作家が次々と上海を訪れ、上海の文化人との交流を深めていた。そして上海の文化人は西洋の文学作品の翻訳に取り組み、その輸入に不可欠な役割を担った。

最も重要な課題は翻訳であった。それは西洋言語のテキストを中国語へと書き換える技術的な行為としてだけでなく、西洋と中国という文化の仲介過程として、より一層、重視されるのであった。(SM:144)

翻訳を通して上海の文化人は西洋文学を吸収、模倣し、そのプロ

セスのなかで上海の現代作家と都市小説は誕生する。上海都市と関連の深い作家の多くが外国文学を専攻していたものや、海外留学の経験者であったのは単なる偶然ではない。一九二〇年代から三〇年代にかけて活躍する彼らの作品はそれぞれに個性的ではあるが、作品の中で上海を誘惑に満ちた、モダンで西洋的な舞台として描いているところは共通している。そしてその典型ともいえるのが劉納鵬¹⁾の短編小説である。

短編小説集『都会風景線』で、劉は主に百貨店やダンスホール、映画館、それらが織りなすネオンの世界に注目した。そこで繰り広げられるのは軽い出逢いと誘惑、恋の戯れにセックス。愛の三角形をつくるのはいつもモダンな外見の一人の女と二人の男たちで、彼女は彼らの心を奪い、そしてそれを捨てて立ち去っていく。ちょうどグレタ・ガルボの顔が世界のアイドルとなっていたこの時期、劉のヒロインはショートカットに理性の額、チェリーのような唇とシャープなギリシャ風の鼻、高い胸、鰻のように柔軟な肢体をもっていた。Leeによれば、劉が描くこのような女性像はあまりにも奇異である。この奇異さは Lee に「このような小説は一体どのような文化基盤から生み出されたのだろうか」(SM:193)、という問いを提起させる。Leeはこう。

劉の小説はまったくの捏造でもなく、日本の新感覚派からの単純な模倣でもない。むしろ劉の小説はそれが作られたのと同じ文化的環境の、小説による投影であり、上海出版文化の他のジャ

ンルとの直接的な関係性をもつものでもある(SM:193)。

劉の小説のヒロインは雑誌の表紙や写真、映画などに登場する女性像からつくりだされたものである。劉はハリウッド女優や東京モガの女性像を、上海を背景とする小説の中にまで連れてきた。小説のヒロイン達は上海の男女が普段出入りするダンスホールや喫茶店などに現れ、ごく普通の上海市民と同じ空間を共有する。実在する上海の空間と想像上のモダンガールが一体化し、ハリウッド映画の女優や東京のモガは上海の女に生まれ変わった。劉の小説におけるこうした置換は異国風の女と中国人の距離を縮め、さらに読者自身の体験が、彼の小説により一層のリァリテイを付与することになる。

このような都市小説が一般によく掲載されたのが新聞紙上だった。そのため上海市民は新聞の三面記事と一緒に都市小説も読むようになった。劉と同じく現代派作家であった叶靈鳳の『時代ガール』が掲載されたとき、熱烈な読者は作者につきのような手紙を寄せ、真剣に質問した。「先日、中国ホテルで一人の女性を目撃しました。彼女が時代ガールなのではないですか」と(SM:263)。まさにこのような現実と幻のあいだで、上海という街そのものも、それが生みだしたはずの都市文化としての小説に投影され、そして構成されていく。

Leeは開港から都市の発展が頂点に達する一九三〇年代までに、租界を中心に形成された都市の公共空間とそこを舞台とする現代的な消費を追うことで、都市上海の物質的側面の基盤整備を行った。

そしてこの物質的側面を重要な背景に、現代都市の精神的な様相を浮き彫りにしようと試みた。そのためにLeeは出版文化と文化人の行動に焦点をあて、現代文化の編成の様を捉えようとした。こうして一九三〇年代に世界有数の大都市に数えられた上海の、コスモポリタンな現れは、文化というはかりがたい一面から分析され、上海が物質のみならず、文化の面でも多彩な国際都市だったことを示したのである。

3 石庫門から展開する地域コミュニティ

『F』が、二〇世紀前半の上海に注目するとき、まず彼の目に入ってきたのは、無数の人々の到来であった。

十九世紀中頃、上海の人口は約五万人で、その半数は中心地である上海呉城に暮らしていた。物流の中心地としての上海は、商人など外来者の往来も頻繁な商業の町になっていた。ただし当時の中国は重農軽商を正統思想としており、上海は中央政府から重視されることもない、一地方にすぎなかった。

だが一八四五年の外国人居留地の設定で上海の規模は大きく変わる。中国最初の外国人居留地は広州にあったが、外国人にとって排他的な広州はまるで牢獄の生活を思わせる息苦しさがあった。一方、自由主義の空気漂う上海では外国人も気楽に生活できると感じた。租界は地元住民の集中する上海呉城ではなく、外の荒地地を開拓されたが、外国人の領域としてその規模は広がっていった。一八五〇

年、公園や劇場なども登場し、上海租界の外国人は横浜やカルカッタでみかけるような、西洋人の典型的なアジアでの安楽な生活を過ごした。

一八五三年、小刀会の蜂起と上海県城の占領という政治情勢の混乱が生じると、県城の中国人が租界へと大量に押し寄せ、租界に暮らす中国住民はそれまでの五百人から一気に二万人にまで膨れた。以後、外国人居留地とはいえ、住民の圧倒的多数は中国人という華洋雑居の状態が始まる。[1]はいう。

まさにこのような意図せざる華洋混合が、上海を中国唯一の大都会へと変貌させたのである。(BN 25)

華洋雑居後、荒地に生まれた租界上海は上海県城を「旧」市街地へと追いやり、新しい上海の中心となった。それは夢の大都会として欧米、日本、インドなど諸外国の冒険家や芸術家、娼婦などを惹きつけた。さらに租界の安定と中国国内の戦乱のため、租界を目指す中国人移民の勢いは止まることがなく、一八五五年から一九三〇年までの間に、租界人口は五十倍にのぼり、そのうちの九七%を中国人が占めるにいたった。また仕事と豊かな生活を求め、全国各地から上海へとやってくる人も跡を絶たず、一九二〇年には非上海出身者は八五%に達した。太平洋戦争の数年をのぞけば、上海の外国人口はたしかに大きかったが、それでも全市人口の三%を越えることはなかった。上海は外国アクセントの強い都市だったが、

その人口は圧倒的に中国新移民で構成されていたのである。

[2]は都市上海の社会・経済的地勢図を描き出すため、ここに暮らす中国人とその生活を大きく三つの階層に分類した。

まず上海都市の上層部に位置するのがエリート層である。中国国内の争乱を避け、上海へと逃げてきた移民の多くが裕福な地主や貿易商、知識人であり、彼らは上海で買弁などの資本家^①や医者、弁護士、高級ホワイトカラー^②や自営業者、あるいは作家^③、画家、映画スターといった文化エリートとして、その繁栄と平和を享受していた。

つぎに上海の中下層に位置し、「石庫門」と呼ばれる住居と密接な関連をもっているのが「小市民」層で、これは大きく二つのグループからなる。一つは「職員」と呼ばれる会社員や事務員、販売員などのホワイトカラー層で、彼らが石庫門の主な住民である。彼らとその家族を含めた人口は一九三〇年代中頃の上海市人口の約四〇%（約一五〇万人）を占める。もう一つのグループは上海の工場で働く熟練・半熟練工で、彼らの住居のうちの約三七%も石庫門にあつた。

上海の最底辺をなすのは、農村地域から逃れてきた農民が圧倒的多数を占める貧困層である。第一次大戦前後、上海では工業が発展し、多くの仕事が用意されていたが、農村地域では社会・経済の荒廃がすすみ、治安も悪化の一途をたどっていた。そのため農民たちは危険から逃れ、仕事を求めるために上海へと移住した^④。しかし技術もお金も、社会的ネットワークも持たない彼らは、安定した職

や住居をもつこともできないまま、都市の貧民層を形成することになったのである。

ではこれら中国人はそれぞれのどのような生活を送っていたのか。それを知る一つの手がかりが、彼らの住環境あるいは住居スタイルである。上海を見渡したとき、そこにみられる住宅は主に洋風住宅と里弄住宅、小屋のような仮住まこ (shanty) という三種類に分けられる。まず「洋房」ともいわれる洋風住宅は、その名のとおり欧風スタイルの庭つきの多層住宅である。上海のなかでも最も豪華で、そのほとんどは当時のヨーロッパの基準からみても、かなり贅沢な造りになっていた。豪華な洋風住宅は上海が誇るシンボルだったが、上海市民の大多数にとってはまったく無縁の代物だった。

里弄住宅は、上海租界へ移住する中国人の急増に対応するため、一八七〇年代から一九四〇年代末にかけて大量に建築された華洋折衷の住宅である。煉瓦やセメントで造られた家々は長屋のように列をなし、これら家並みの間には通行や風通しを目的とした細い路地が敷かれていた。里弄とは「路地」や「横町」を指す言葉で、このような造りをもつ住宅を里弄住宅と呼ぶようになった。家の造作は年々変化した、とくに一九三五年以前に建てられたものを石庫門、これ以降に建築されたものを新式弄堂住宅という。新式弄堂住宅には石庫門にはない浴室やトイレなどの衛生設備が完備された。また石庫門の窓枠が木製で、床は深紅や赤褐色で塗装されていたのに対し、新式弄堂は鉄製の窓枠とワックスで磨きあげられた木目調の床を特徴としていた。一部の新式弄堂には、洋風の庭園も設けられ、

「花園里弄」とも言われていた。

仮住まいには平房と草房の二種類があった。平房は平屋建ての農村地域に伝統的な住居で、上海の工場で働く労働者や貧困層のために建てられた。一方の草房は草と泥から作られ、せいぜい雨風から身を守る程度の住処でしかなかった。

これらの住宅は上海という大都会で複雑に共存し、上海都市の生態図をつくりだしている。租界の西の方には洋風住宅や新式弄堂住宅が建ち並び、買弁などのエリート層が優雅に暮らしていた。上海の商業地区には商業用の高層ビルと、そのほとんどが石庫門である住居用建物が並んでいる。工業地区では石庫門と平房や草房が混在し、県城に移動すると伝統的な中国式の民居、平房や草房がみられるが、最も多いのは石庫門だった。租界の周縁地域には一九二〇年代から戦乱や飢饉のために上海へと脱出してきた農民層を中心にしたスラム地区が形成されており、ここでは平房や草房が最も一般的で、石庫門住宅がわずかに点在している。

以上の上海図からは、上海の中下層をなす小市民の暮らす石庫門が、上海で最も普遍的で、最も広く分布する住宅だったことが分かる。「」は言う。

里弄、この商企業と住宅地が混在した場所は、近代上海の商業文化に決定的な役割を果たした。(BN:128)

里弄には石庫門と新式里弄があるが、「」が語るのは石庫門のス

トリーである。華洋雜居は租界の不動産の道を拓き、中国における近代的な不動産の始まりも意味していた。市場を見越した大規模な住宅建造と販売は西洋人によってもたらされた新しい商行為で、彼らの主導で進められ、中国人もそれに投資した。一九四〇年の末、上海にみられた住宅の七二%が里弄住宅で、初期の里弄はすべて石庫門里弄だった。

「里」あるいは「坊」は中国の都市においては近隣関係の基本単位を表す言葉で、里弄には十棟からなるものもあれば、百棟もあるものまで様々である。各戸は一世帯単位で設計されたが、上海の地価と人口密度が高いことから、出来るだけ沢山の人が住めるように部屋は改装されている。まとまったお金を用意して家主と直接賃貸契約を結んだ人間が「第二家主」として、家の中の何部屋かを又貸しして生計をたてるのも一般的で、一世帯用の家に数世帯が住んでいることも珍しくなかった。里弄に暮らす第二家主とその客の出身地や職業、背景は様々で、これは上海租界では中国中央政府の影響が弱かったため、住居の移動が比較的容易だったことにも起因する。ゆえに里弄では血縁や地縁を紐帯とするような伝統的な共同体はみられず、長年、隣人として暮らしていても本名も知らず、挨拶もしないというのも不思議ではなかった。とはいえ、狭い住居で複数世帯が雜居していれば、嫌でも顔はあわせる。にわか雨が降れば隣りのお婆さんが洗濯物を取り込み、夏の暑い夜には皆が空き地に卓や椅子をおいて囲碁やトランプ、胡弓を楽しむ。共同の炊事場では主婦たちが毎日噂話に花を咲かせ、日常茶飯事のように喧嘩を繰り返

す。石庫門には中国に伝統的な共同体は存在しなかったが、独特の共同体がここには生まれていたのである。

石庫門住宅での生活は毎朝おまるを洗うことから始まる。中国で最もモダンな町で、スラムの貧民に比べればずっと豊かな暮らしをしている小市民も、依然として伝統的なおまるを使っていた。とはいえものの、肥え車が去ったあとには、彼ら小市民は比較的、恵まれた便利な生活を満喫できた。

里弄には玄関まで届くサービスが数多くあった。散髪や家具の修理、生活道具や食べ物行商など。行商人は物語を語り、歌も得意な天才的な広告宣伝員で、その売り声は里弄に深夜まで響き渡る。上海の夜はダンスホールのもものだけではない。里弄では夜食を売るのも生活の一コマである。

また里弄はただ住むだけの世界ではなく、住居と商売とがミックスされた空間でもある。里弄住宅では通りに面した家のリビングがよく店舗として使われる。このような立地条件の家を借りる人は普通、二階を家族の住居空間にし、一階にお店を構えた。こうすることで、上海で直面する住宅と雇用の二つの問題を一挙に解決できた。そして里弄に開いた店にやってくる客の多くが、里弄に暮らす近所の住民だった。彼らは日常生活で最も基本的なサービスを、自宅からわずか数歩の距離のところまで手に入れることができたのである。

里弄の入り口には大抵、煙紙店が店を構えていた。煙草とちり紙を売ることからこの名がついたお店は一九三〇年には約一五〇〇軒、

三七年には三四〇〇軒もあった。ここではほかに、砂糖や塩といった調味料など日用品も取り扱われていた。

里弄には他にも米屋や石炭店、八百屋、洋裁店など多くの店が軒を連ねた。たとえば石炭店。上海は世界でもいち早くガスを導入したが、その普及率は低く、一九四九年当時、ガスを利用できたのは一般家庭の約二割程度でしかなかった。家庭で使われる主な燃料は三十年代初めまでは木炭で、以降、石炭に変わった⁽⁹⁾。夫が経営し、妻子がそれを支える家族ぐるみの石炭店はどこの里弄にもある商売の一つだった。

そして洋裁店。東洋のパリと呼ばれた上海は服装で人を判断する一面がある。中山服とチャイナドレスを生み出した上海は、新しいファッション感覚の発信地でもあった。培羅蒙の背広に、朋街の女性服など数々の有名メーカーが上海に店を構えていた。しかし上海の小市民は普段そうした有名店ではなく、里弄の洋裁店を利用して⁽¹⁰⁾いた。さらに洋服代を節約しようとする人々は自分で洋服を作っていた。『J』はいう。

ファッションの街・上海。そのファッションセンスの革新には、単に有名専門店のデザイナーだけでなく、里弄の数多くの小さな洋裁店、そして沢山のアマチュアのお針子も関わっているの
である。(『J』259)

ある調査では四三六人の上海人のうち二五七人が自分で服を作り、

一〇四人が裁縫を頼み、四六人は田舎から持参した服を着ているという結果がでた。ここには上海のモダンなイメージとの距離があり、中低階層の抱えるジレンマが見られる。公共の場で面子は守りたいが、流行に乗るほどの経済力はない。アマチュアのお針子になって洋服生地を買いに行き、店員からアドバイスをもらい、雑誌をみながら自信作を縫い上げていく。上海のモダンな装いは南京ロードの百貨店や、そこに展示される数々の舶来品からだけでなく、里弄に暮らす多くの中国人によっても積極的に創りだされていたのである。

『J』はまた里弄で最も一般的な店の一つ老虎灶を取り上げ、モダン都市上海の顔を描き出そうとする。老虎灶とは一日中お湯を提供する専門店のことで、給湯設備が整っていなかった里弄の住民にとって、これは非常に便利なサービスであった⁽¹¹⁾。そのため老虎灶は上海のいたるところで見られるようになり、一九一二年には一五九軒、一九二八年に一三三軒、一九三六年には二千軒以上もあった。さらに里弄の住民は老虎灶でお茶⁽¹²⁾を楽しみ、夏になれば銭湯としても親しんでいた。『J』がとくに注目するのは、老虎灶の茶屋としての役割である。

茶屋は中国の伝統的な都市生活には欠かせないもので、どんなに小さな地方都市でも茶屋がないことは考えられないほど一般的だった。だがモダン都市上海にはレストランやバーなどが数多く店を構えていたため、茶屋はほとんど姿を消したというのが定説だった。

一九三三年に発行された『上海指南』の記事でも、市内のレストランについては十四頁にもわたって紹介されたが、茶屋についてはたっ

たの五行しかなかった。編集者は上海のモダンを裏づけるかのよう
にこう書き記していた。「上海では、茶屋はあまり盛んではないの
だ」と。

「L」にとってこれは一つの疑問だった。中国のほとんどすべての
地域で見られる茶屋が、上海が完全に近代化され「西洋化」された
ために消えてしまったということがありうるのだろうか。「L」はこ
の問いに対して、次のように答えている。

老虎灶の物語は我々に、その答えはノーだと教えてくれる。茶
屋は上海に生き残っていたというだけでなく、老虎灶 という
形で復活を遂げていたのである。(BN: 264)

「L」は老虎灶の物語から、上海都市をつくっているものは西洋や
モダンだけではなく、中国やその伝統でもあるのだと主張する。だ
が同時に、里弄に生まれた老虎灶は中国の伝統的な茶屋とは必ずし
も一致しない。老虎灶は中国の他のどの都市でもなく、西洋モダン
の香り漂う上海租界を背景にして初めて誕生しえた。そしてそれは
華洋雑居、住商混合の里弄とそこに暮らす上海小市民自身について
もまた例外ではない。

里弄の商店から小市民の生活にせまった「L」の視線はさらに里弄
にほど近い、野菜などを扱った食料品市場へと広がっていく。とい
うのも里弄の人々は行商などだけでなく市場もよく利用していたか
らである。

最初にできた市場は一八六一年の寧興市場で、一八七一年からは
八仙橋市場なども人々の生活を支えてきた。八仙橋市場では中国と
西洋両方の品物が手に入り、華洋市場とも呼ばれた。一九三七年八
月には上海に大小四九もの市がたっていた。

上海の人々は家庭料理のことを小菜と呼ぶが⁽¹⁾、開港後、全国
そして全世界から食文化が集まってきた上海では、この小菜の姿は
大きく変わっていった。豊富な食品を提供する市場を背景に、上海
人の主食は植物性食品から動物性食品へと変わっていった。上海工
人の主食をみたとき、その栄養状況は明らかに他の町よりすぐれて
いた⁽²⁾。また移民の町上海では通常家族構成員の出身地がバラバ
ラで、それがまた上海の食卓に影響を与えた。料理を準備する嫁か
ら見ると、舅は蘇北、姑は寧波、母は広東、父は四川というパター
ンは珍しくない。家族全員の舌を満足させるため、嫁は各地の食材
が集まる市場へ出かけ、食事の仕度をする。それは羅宋湯というロ
シア風スープも取り入れた地域色、国際色豊かな上海家庭料理。家
族が囲む食卓には各地の訛りが残る上海語が飛び交う。上海家庭料
理を味わい、上海語という新しい言葉操る里弄の小市民は、この
料理や言葉の創始者でもあるのだ。

住空間と商業空間のミックスされた里弄とそれに近接する市場と
いう世界を通して、「L」は上海都市に遍在する商業性を明らかにす
る。そして都市上海の姿にさらに接近していくため、「L」は里弄を
中心とした小市民の生活世界だけでなく、その周縁に広がるスラム
での貧民層の生活にも目を向ける。

一九二六年、上海では五万戸以上のスラム住宅に二〇〇三〇万人の住民が暮らしていた¹⁵⁾。四八年には七万世帯、約三〇〇万人がスラムで生活し、その数は上海人口の一割を占めていた。スラムの貧民が享受できる都市のメリットは微少だったが、生活の困難が彼らをこの地から離れさせなかった。それどころか農村危機によって暮らせなくなった彼らの故郷の家族たちまでもが、上海を目指して次々とやってくるほどであった。

こうした都市貧民層の代表格が人力車夫である。車夫になるのは主に江蘇北部出身の農民で、肉体労働しか売り物のない彼らには、この商売は生活を支える重要な手段だった¹⁶⁾。

なにより人力車の仕事は上海に来た農民を都市住民へと変えていくという意味で非常に興味深い。字がほとんど読めない彼らは上海市内を走り回るうちに、通りの名前を覚え、片言の英語も話せるようになる。人力車夫は毎日たくさんの人と接触し、街の様々な情報を把握できるため、長い時間機械に向かう工人よりずっと都会的である。客と交渉し、自分のサービスを積極的に売る彼らの姿は都市に来た農民というより、実業家や行商者と同じ商売人へと変貌している。それは農村での生活世界とは大きく隔たり、彼らの行動も上海の商業世界と商業文化を成り立たせる煉瓦の一つになっていく。

人力車夫は貧困層に属すが、上海小市民の予備軍でもある。スラムから脱出し石庫門に入居して、本当の市民生活を送るのが彼らの夢である。上海人力車互助連盟は彼らとその家族のため、無料で教育を受けられる学校を九つ建設した。教育はその子弟を貧困から脱

出させる一縷の望みとなる。こうしてスラムに暮らす人力車夫の世界の環は、上海都市での商売と生活によって、里弄の小市民世界の環へと開かれていく。

以上のような「E」の議論から、その焦点が石庫門での小市民の生活にあることは明らかである。石庫門は生活、働き、娯楽を用意する城の中の城。その城の主となるのは、外国人ではなく、租界への中国移民、とくに最初は上海県城からの移民なのである。彼らの入居によって、上海の租界は皇城や中国の他の都市が培ってきた中国の色を受け取ることになる。

石庫門の物語を中心にした二〇世紀前半の上海小市民の生活は、ネオンを超えて、もう一つの世界があることを教えてくれた。眩い光を放つネオンの影に、上海のあらゆる区域に浸透し、その土地を大きく領有する石庫門が広がっているのであった。

結語

以上、LeeとLuの著作を社会学の視点から再構成することによって、上海の異なる画像に遭遇することとなった。一つは、近代的、西洋的な文化の、巨大な感覚器官と仲介になっていったコスモポリスとしての上海。もう一つは、中国の小都市との親縁性を持つ里弄から広げていった地域コミュニティーとしての上海。と同時に、この二つの画像に映った上海は、それぞれ、西洋或いは中国的な色が

より鮮明になるものの、ともに西洋と中国、また中国各地の文化が融合されて生まれた新しい空間でもある、というところが興味深い。「上海という街自体が旧と新、中国と西洋の対照が提供した」と Lee が述べたが (SM : 7) 、一方 Lu がこのように指摘する。

もし上海が二つの文化——西洋と中国——が出逢い、しかもそのいずれかに屈することのなかった場所だったとするならば、それは両者がまったく譲りあわなかったからではなく、いずれの文化も驚くべき張力を示したからに他ならない。そしてこの結合こそが、多くの人々を虜にした、上海の魅力を生みだしたのである。(BN : 297)

上海を描くのに、Lee は文化人の行為に注目し、文化人の営みを通して一般市民の動きも示された。一方 Lu は、市民特にその中堅である上海小市民の日常生活を再現する。二人の議論の重点が違ったが、ともに近代都市上海を現場の人々の生きられた世界として描き出そうとし、上海における西洋と中国の要素の置換しない結合を強調し、このような上海を見事に定着させた様々な影響の中、なりより無視できない力は上海住民の相互行為であることに導く。

上海住民の行為は一つの近代化という重大な歴史変動の中の生活体験でもある。雑誌経営者、作家、人力車夫、裁縫、主婦、ダンスガールなど、人々が近代化を経験し、それぞれの不屈な適応の記録

が残った。彼らの体験は結局一つのかつてないカルチャーに導いた。それはコスモポリスと地域コミュニティを共生するモダン上海の都市文化。その変化を読むことができ、上海はいかに今の上海とにたどりついたのか、今の上海はどのようなものを失い、どのような課題を未だ残っているのかを一層分かるようになるだろう。

注

- (1) 台湾生まれ日本育ち。青山学院大学と慶応大学で文学を専攻。日本の新感覚派を二〇年代後半にいち早く上海に紹介。
- (2) 上海郊外に移住し市内の工場で働く機会を待つ農民も少なくなかった。彼らは工場勤務よりも郊外の農村で従来どおりの仕事に就くパターンに変わった。
- (3) 中国銭荘で働いたのち銀行に勤務する伝統業界からの転向組であり、実業家でもある。元地主は上海で不動産業や紡績業などに投資する資本家に変身した。主に広東と江南の移民によって、上海民族工業の基礎が作られた。
- (4) 上海人口の一割程度。全国で上海が一番多い。キリスト教教育や留学経験があり洋房で暮らし、事業投資もする。
- (5) 経済状況は資産家と比較にならないが生活は裕福で文化人の上層。他の文化人、例えば亭子間文人は店員の収入とほぼ同じ。石庫門で暮らし精神的にはエリートに属す。
- (6) 中国では社会的・文化的な面で都市と農村に明白な区別はなかったが、二〇世紀以降進展した現代化と工業化により都市は農村に優越する存在になる。両者の連続性は差異性に代われ、その格差も急速に拡大。とくに現代化と工業化の最先端をいく上海は憧れの地に変わった。

- (7) 一九四六年以前、六百軒あった印刷工場と本屋のうち半分は里弄にあった。南京ロード近くの里弄の錢荘は小規模だが金融都市に貢献。四〇年末、半数のホテルは里弄にあった。里弄には学校、診療所、弁講師事務所、銭湯もある。
- (8) 内山完造の本屋は隣接する二つのリビングを使った。
- (9) 一九八〇年当時でも五一%の家庭が石炭コンロを使っていた。
- (10) 一九四六年に裁縫連盟に登録されていた四二〇軒の店舗で、三〇五〇名のお針子が働いていた。
- (11) これは給湯設備の整った洋房では必要のないサービスであったし、草や木で造られた小屋が密集するスラム地区では防災上問題があるため禁止されていた。
- (12) 老虎灶はしばしば焼餅店の隣にある。朝と夕方、焼餅を 食べながらお茶を飲むことは日常的な光景だった。
- (13) フランス料理は大菜と呼ばれた。
- (14) 一九四〇〜四二年の北京・上海・重慶の比較調査によれば、上海は卵、魚、肉などの栄養摂取は十三・二%、北京は三・二%。重慶工人の食費は上海工人の四五・七%にすぎない。
- (15) 最初のスラムは二〇年代に形成。この界限は蘇州河沿いの工場区域でもあった。電気もなく、公共水道は二箇所に設置されているが、住民は一人もいて、ほとんどの人が生活用水に蘇州河の臭い水を利用せざるをえなかった。
- (16) 収入は工人より低い、農繁期に故郷に戻り、農作業を手伝っていた半都市人の者には働く時間が自由に決められることも大きなメリットとなっていた。

参考文献

LEE, LEO OU-FAN, 1999, *Shanghai modern: the flowering of a new urban culture in china, 1930-1945*. Harvard University Press, Cambridge, Massa-

- chusetts.
- LU HAN-CHO, 1999, *Beyond the neon: lights everyday shanghai in the early twentieth century*. University of california press, Berkeley and los Angeles, California.
- 王揖唐、一九二四、上海租界問題、上海商務印書館
- 唐振常監修、一九八、上海史、上海人民出版社
- 熊月之監修、一九九、上海通史、上海人民出版社
- 沈從文、一九八五、沈從文文集、花城出版社・三聯書店香港分店
- 高橋孝助等監修、一九九五、『上海史』、東方書店
- ジンメル、一九九九、川村二郎編訳、『ジンメル・エッセイ集』、平凡社
- 中野正大、宝月誠編、二〇〇三、『シカゴ学派の社会学』、世界思想社

A Cosmopolis Grows Together with a Local Community : The Birth of Modern Shanghai as a Key

Ye WANG

With the opening of the port in 1843 as a turning point, the foundation of modern life began. In the 1930s, Shanghai became one of the biggest cities in the world. Such a miraculous trace has attracted much discussion. Shanghai study became vivid since 1980s. In sociological field however no big results were recognized.

This paper picks up two historian's works, Lee, Leo Ou-Fan, *Shanghai Modern: The Flowering of a New Urban Culture in China 1930-1945*, and Lu Han-Chao, *Beyond the Neon Light: Everyday Shanghai in the Early Twentieth Century*. Lee studied how the city Shanghai influenced the spirit life of its residents. The life style developed from the settlement, which involved the wall city and finally formed the Shanghai urbanism. While Lu noticed the local community, which started from the wall city, thus putting settlement on the extended line.

Rebuilding their works from a sociological point of view, we meet two contrasting images of Shanghai, a cosmopolis with a big organ to feel the western culture and a local community with a big closeness to other small cities in China. Although the Shanghai taken in these two pictures has an either western or chinese color, it's the novel space produced by the mix among the western and chinese, also various chinese local cultures.

The detail discussion of Lee and Lu may be different. Both show Shanghai as a world for people to live in and come to the conclusion that among the influences helped the establishment of the modern Shanghai, the power of the action and interaction of Shanghai residents can't be ignored. We see how Shanghai developed, we understand what is lost and what is still unresolved.

Key Words : public space, cosmopolis, linong (the alleyway house), local community, symbiosis